



CONTENTS

「平成」の年号終了を目前に控えて
SDGs 達成と地方創生に向けて
中米コスタリカへの出張の報告
「飛び出そう！宮崎から国際協力への道」

山 口 良 二
植 村 吏 香
佐々木 正 吾
田 代 芽 衣



「平成」の年号終了を目前に控えて

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会会長
宮崎大学農学部 山 口 良 二

「平成」の時代も来年の 4 月末で最後になると予想されています。宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の結成は平成 6 年 3 月、遅れて 3 年後にエキスパート宮崎の創刊は平成 10 年（1998 年）2 月になりました。当時の創刊号に、エキスパート初発刊の前すでに結成されているとの記載により、平成 29 年度（2017 年度）末、すなわち平成 30 年（2018 年）2 月に連絡会結成 20 周年を迎えて、それに伴い 19, 20 号の発行し、設立 20 周年と記載したのはエキスパート創刊から 20 周年であり、連絡会結成としては 23 周年でした。今回 JICA エキスパート宮崎を JICA 九州のがホームページに載せていただいたのは大変意義あることです（<https://www.jica.go.jp/kyushu/renrakukai/miyazaki.html>）。「平成」の年号が変わると、一時代終えた感があります。これまで、国際化、グローバル化というかけ声に、宮崎大学でも留学生を増やし、活動方針にもある様に宮崎

県と海外諸国との交流活動の促進、充実に資する活動や会員相互の情報交換・交流・親睦に関することを実施してきました。さらに、ODA の進展動向に関する調査研究および提言、JICA および JICA 九州支部の業務遂行の方途に関する助言、支援等に関すること行ってきましたが、後談の部分は JICA 組織も、世の事情も、JICA 専門家も変わり、連絡会としてはどこまで経験が生かせる状況であろうかと思います。その中でエキスパート 7 号に当初（発足当時ではないかと思いますが）の会員は 18 名であったが、平成 17 年（2005 年）には 56 名規模になったと言う喜ばしい記載がありました。徐々に増加してはいたものの、その後は JICA 専門家自体が少なくなってきたために専門家としての派遣がなければ当然のことながら帰国連絡会の会員増は見込めないわけですから、専門家会員の増数は望めません。平成 30 年（2018 年）5 月現在、50 名前後です。国際貢

献も多様性がでてきて専門家が見つからないためその役割をコンサルタントが代行するという事態が起こってきています。専門家候補者の大学教員も専門が細分化され、派遣された後の大学には代用できる教員が存在しないことが多くなったことで専門家を派遣しにくくなってきました。会社やその他の団体組織もそうそうに専門家派遣ができないのは同じで状況であろうと思います。それゆえ、会員を増やすことや関係者のつながりを持つために、工夫や努力も必要になってきました。そこで、草の根等 JICA プロジェクトに関わってきた人たちも会員として参加できないか、JICA から出向しておられた鹿野先生にお骨折りいただき JICA に問い合わせ検討してもらいました。JICA の規定からも現段階では大きな問題はないであろうということでした。そこで、大学に勤務されている数名の先生にも会員になっていただきましたので、少し JICA 派遣専門家連絡会にも朗報であろうと思いますこの会の目的には相互の面識を持つことや親睦もあり、国際化やその経験を活かし、さらに啓蒙する機会や場所でもあり、これらの点においてもこの会は有意義であります。

宮崎県 JICA 3 団体合同総会の試行が昨年からはまりました。アンケートでは高評価だったとのこともあり当分継続することになりました。JICA 関係者や関連する団体はこれまで個々に活動してきましたが、専門家も他の団体の活動状況を認知することで、俯瞰的に活動をすることができる様になろうかと思っています。専門家として学生などの若い人たちとの交流が日常からあっても若者にとって専門家は少し遠い存在であり、国際協力や海外に興味を有する学生などの若者たちは、むしろ若者に近い情報や現実に近い経験を有するより身近な海外協力会や支援する会の会員の方とお話ししたり、専門家が橋渡しすることも重要であろうと思います。そのために 3 団体が一緒に総会を行い、懇親会を行うのは海外を違う側面から経験した人たちの交流によってより意

義深いものになることと思われます。専門家の会として若い人向けに啓蒙の映画を無償で上映することにコミットして評価はかなり高かったように思われます。

国際協力は日本も元気にする、国際協力は日本のためでもあることは、今更言うことではありません。さくらサイエンス（日本への海外からの招聘）、トビタテ！留学 JAPAN、国際交流協定による活動、ピースプロジェクト（アフガニスタンからの人材受け入れと交流）、ABE イニシアティブ（アフリカの若者の人材育成）等多くのプロジェクトが進められております。JICA でも技術プロジェクトや草の根事業等があり数えたらきりがなくらいに進められ、多くの方の参画があります。それだけではなく、多くの専門家が帰国後その経験を各方面に活かし周囲を元気にし、また、助言し、国際的視野で話をします。青年海外協力隊の経験者が地域社会に帰って、経験を活かした豊かな社会作りを行っています。生物の社会では、小集団で純化していくと発展せず、滅びる方向に向かっていきます。生物における多様性の重要性は農学、生物を勉強したものなら、よく理解できますが、実は実社会でもそう考えられます。これまでの経験や知識を活かして国際貢献を日本への活力へ活かして欲しいと言うより、これら 3 団体の会員は自ずと、意識せずその活動をしていると思います。



～ SDGs 達成と地方創生に向けて～

JICA 九州国際センター所長

植村 吏香

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の皆様、いつもお世話になっております。JICA 九州の植村と申します。皆様方には日頃より当機構の事業に対し、様々なご支援を賜っており、大変感謝しております。私は 2016 年 4 月より当センターに次長として赴任し、昨年 4 月より所長を拝命いたしました。皆様方にはこれまでなかなかお会いする機会がなく申し訳ございません。

実は、私は国富町の出身であり、高校卒業まで宮崎で過ごしました。実家には今も母が 1 人で住んでいますが、東京の大学に進学後、就職してから約 30 年は九州とは全く縁のない毎日でしたので、なかなか実家に帰省することができませんでした。今回、思いもよらず北九州に転勤することになり想定外だったため驚きましたが、実家にも帰省しやすい北九州での生活を大変楽しんでおります。

ところで、派遣専門家 OB の皆様もよくご承知の通り、JICA はこれまで日本政府の ODA 実施機関として、開発途上国の開発課題をいかに改善できるか、ということを主眼として活動を実施してまいりました。しかしながらここ数年、海外のみならず日本国内各地域の「地方創生」に対しても、JICA としてもっと貢献すべきだという議論が JICA の中でもなされるようになって来ております。これは宮崎県のようなまさに「地方」出身である私としても非常にうれしい変化であり、JICA の中で九州を所管する組織の長として、微力ではありますが九州内を活性化する業務に携わっていることに大変幸せを感じております。

また、JICA は、今年度の事業実施における重要なキーワードとして、SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) の達成を掲げています。皆様も御承知かとは思いますが、この SDGs は 2001 年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された 2016 年から 2030 年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための 17 のゴール・169 のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っているものであり、開発途上国のみならず先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものとして日本としても積極的に取り組んでいくべき開発目標です。

現在、日本各地で少子高齢化が大きな課題として顕在化しており、九州内でも人口減少が大きな課題になっていると認識しております。このような状況に対し、ODA の実施機関である JICA として、これまで以上に日本国内の「地方創生」に資することを念頭におきつつ、九州内での SDGs 達成に貢献できるよう各種事業を進めていく所存です。

各県の専門家連絡会や協力隊 OV 会は、日本国内における JICA の貴重なパートナーです。これまでより一層、皆様方と密に連携しながら、各種事業を進めていきたいと考えております。どうぞ引き続きまして、ご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

以上



中米コスタリカへの出張の報告

しょうご農園 代表
佐々木 正 吾

2017年2月16日から、JICA 国際協力機構の依頼を受けて中米コスタリカに出張してきました。任務は有機栽培の現場視察と、「ラテンアメリカ有機農業シンポジウム」にコメンテーターとして参加し講演をすることです。驚きと感激の8日間。私の第二の故郷であるコスタリカでの出来事を紹介します。

親友はあったかい

29年前に青年海外協力隊で活動した時からの親友と、12年ぶりに再会。抱き合って、これまでの互いの道のりをねぎらいました。当時私は25歳。理想を求め、同国の野菜生産地で有機農業の普及に挑みました。あの頃は不可能と言われた無謀な挑戦。彼らは私を信じて共に戦ってくれた仲間です。そして現在、中南米屈指の有機栽培農家に成長しています。彼らは JICA 課題別研修「ラテンアメリカ地域持続可能な環境保全型農業普及手法」コースの在外研修に協力し、研修員に講習をしていることから、彼らの農場が現場視察地に選ばれました。ちなみに、しょうご農園でも本邦研修で研修員を一日受け入れてきました。

標高1800mの傾斜地で高原野菜を通年栽培する農場は素晴らしく、二代目の息子・娘たちが後継者として活躍しています。その技術・営農レベルは日本でも上位に入るでしょう。まさしく篤農家であり、「農民から農民への技術普及」に必須であるキーファーマーです。

私が百姓になった理由の一つは、彼らから受けた

刺激だったことを思い出しました。彼らのような農家になりたかった。私と妻が高城町有水に移住して14年。理想の農業と考える、自然養鶏と有機栽培を組み合わせた小規模有畜複合農業を作り上げています。まだまだ発展途上ですが、コスタリカの友と同じ百姓となり、ようやく真の仲間になれた気がします。



ドミニカ共和国からも友人が

コスタリカの活動後に赴任したドミニカ共和国で共に働いた農業普及員が、シンポジウムに参加していました。まさかの再会にびっくり仰天。彼らに会うのは16年ぶりです。私が JICA 専門家として農務省で開始した有機農業普及業務を続けていると教えてくれました。そして任期中に2KR見返り資金を活用して建設した発酵有機質肥料（ボカシ肥）の製造工場も稼働しているとのこと。どうなっているか気にしていたので、心底ほっとしました。カリブの楽園に残した足あとは消えていませんでした。

今回のシンポジウムは、前記した JICA 研修のフォローアップ研修として実施され、16か国から帰国研修員50名が参加して活動を発表し、事例を

共有して相互向上を図り、結成されている帰国研修員ネットワークの強化を目的としました。ドミニカ共和国の元カウンターパートも活動発表を行いました。私はその成果に感心するとともに、誇らしく感じました。どんな形の国際協力であれ、その後の自助努力による継続と自立こそが大事なのです。



嬉し泣き

1994年10月20日、コスタリカ北西部のニコヤ村で協力隊員がバイク事故で亡くなりました。享年23歳。私がシニア隊員としてリーダーを務めた有機農業プロジェクトのメンバーでした。あまりにもつらい思い出です。その彼と一緒に働いていた農民が、なんとシンポジウムに特別参加していたのです。驚きに言葉がありませんでした。あれから紆余曲折を経て、現在は帰国研修員からの指導で、有機栽培に取り組んでいると語ってくれました。心にささっていた刺がとれた思いです。ほんとうに、ほんとうによかった。



本場のマンゴー

久しぶりのコスタリカで楽しみにしていたのが熱帯果物。大好物のマンゴーをたっぷりと食べてきました。コスタリカの帰国研修員からもらった1キロ近い有機栽培マンゴーを、指で皮を剥いて丸かじり。甘くて香り高く、まさしく自然の恵み。残念ながら、宮崎県の温室育ちの高級マンゴーが霞んでしまいます。本場の本物にはかないません。他にもパパイヤ、パイナップル、オレンジにスイカなどなど、多種類のフルーツ。飢えを知らない豊かな南国には魅力がいっぱいです。



奇跡

大げさかもしれませんが、今回の出張で奇跡を感じました。嬉しい出来事が続いて起こったからです。これまで夢に向けて頑張ってきたご褒美でしょうか。自分がやってきたことが誰かの役に立っていること、その結果から新しい可能性が芽生えていることを知り、自分の存在意義を感じることができました。生まれてきてよかったと思います。巡り会えたすべての皆さんに感謝です。ありがとうございました。



「飛び出そう！宮崎から国際協力への道」

JICA デスク宮崎・国際協力推進員

田代芽衣

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の皆様、いつもお世話になっております。

私は高校入学時までを京都府の宇治市にて過ごしました。小学校の近くには 10 円玉の裏に描かれている平等院鳳凰堂があり、木の間から平等院に忍び込んで池の鯉に餌をやるのが帰宅途中の日課でした。



国際協力はおろか、世界に目を向けることにさえ興味を持たなかった私は、その当時日本で唯一多くの外国人を目にする機会のある京都に住みながら、外国人が「Hello!」と近づいてくるとどう対応していいかわからず、逃げ隠れるしか術を見出せないよ

うな子供でした。自分の身の周りに興味をもつことが精一杯な私が 20 年後、青年海外協力隊に参加し、現在の推進員としての業務に携わるようになることはその当時想像もしておりませんでした。

協力隊を知るきっかけとなったのは、看護師として働いていた病院の同僚がアフリカに派遣されたことでした。2 年間の活動を終えて帰国した彼女の姿が眩しいほどに見違え、輝いてみえたのは今でも忘れることができません。

彼女から感銘を受けた私は、「自分も協力隊として活動したい!」と意思を固め、脇目もふらず参加へ向けた道をつ走りしました。そして、念願の青年海外協力隊員・看護師隊員として 2011 年 9 月からラオスのサイニャブリー県に派遣されることになりました。

2 年間の活動とラオスでの生活を通して、「本当に多くの大切なこと。」を彼ら（ラオス人）から沢山教えて頂きました。ラオスという国、ラオスの人々が大好きになり日本へ帰ってきました。世界の為に、日本の為に。そして身近で関わる人の為に、…。私は何ができるのだろうか？と改めて、考えさせていただけのきっかけを与えていただいたように感じます。

協力隊時代の 2 年間はひと言では語り尽くせませんが、これからも生涯忘れることはありません。本当に多くの感謝で溢れた特別な 2 年間を過ごしました。

国際協力推進員は「地域の JICA 窓口」として JICA が実施する事業に対する支援、広報・啓発活

動の推進、自治体・地域関係者と連携を図りながら市民の方々へ国際協力への理解を促進したり、連携を図らせていただいております。業務のひとつである「出前講座」にお話をさせていただく機会があるのですが、講座のなかで ODA/JICA の事業目的について話したり、協力隊での体験談をさせていただいています。

そのなかで皆さんには「国際協力の方法は多種多様であり、自分なりの国際協力のかたちを見つけていただきたい。」ということをお伝えしています。国際協力は現場でできることのみならず、地球上のどこにいても、宮崎に居ても、地域に居ても、自分なりに展開できるかたちがあると信じています。そして、私自身も常に「自分にできる国際協力って何だろう。」と、模索し続け、これから先もずっとずっと問い続け、その時々でできる自分のなかでの BEST を探していくのだと思います。



現在、国際協力推進員として日々の業務に携わらせて頂く中で、責任の重大さを感じながらも、常に新たな発見や未知との遭遇である刺激シャワーを浴び、改めて幸せな立場に立たせていただいていると実感する毎日であります。

今後も微力ではありますが皆様方と密に連携しながら、事業に携わらせていただきたいと考えております。どうぞ引き続きまして、ご支援、ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

それでは、最後になりましたが、宮崎県 JICA 派

遣専門家連絡会の今後の益々の発展と、会員の皆さまのご多幸をお祈りして稿を閉じさせていただきたいと思います。

編集後記

JICAエキスパート宮崎第21号をお届けさせていただきます。今回、JICA九州国際センターの植村所長に特別寄稿をいただきました。また、しょうご農園佐々木正吾氏にはご多忙の中、昨年度の講演内容をベースに執筆いただき、JICAデスク宮崎の推進員として活躍されている田代芽衣氏に素敵な寄稿をいただきました。私達の身の回りでも国際化が進む中、県民の皆様に広くJICAの活動を知っていただき、国際協力の展開・支援を進めて行きたいと考えています。宮崎県JICA派遣専門家連絡会は宮崎県海外協力協会と宮崎県青年海外協力隊を支援する会と協力して合同総会を開催しております。会員の皆様の参加を心よりお待ちしております。本連絡会の活動について皆様のご提案、ご意見をお寄せください。ご連絡は下記までお願いいたします。

会長 山口良二 a0d402u@cc.miyazaki-u.ac.jp

幹事 大野和朗 ohnok@cc.miyazaki-u.ac.jp

乗峰順三 nori@cc.miyazaki-u.ac.jp

野中成晃 nnonaka@cc.miyazaki-u.ac.jp

佐伯雄一 yt-saeki@cc.miyazaki-u.ac.jp

河野 久 kawano.hisashi@of.miyazaki-u.ac.jp

事務局:〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学農学部内